

広島修道大学
人文学部 人間関係学科
かわぐち・かずや
河口 和也教授
(広島市・51歳)

これまで辞書にすらなかった「異性愛」という言葉が、ようやく掲載されるようになり、テレビでは、「おねえキャラ」のタレントが、日々出演している。しかし、そこに至るまでには、数々の差別や偏見と闘ってきた歴史があり、今も、多くの同性愛者が、差別や偏見と闘い続けている。「いろいろな性の形を理解してほしい」。同性愛者として、ジェンダー・セクシャリティの研究を続ける河口和也さんにお話を伺った。



Profile
筑波大学大学院博士課程社会科学研究科を単位取得満期退学。日本社会学会、日本解放社会学会、日本エイズ学会、日本女性学会などに所属。平成15年から広島修道大学人文学部人間関係学科教授を務める。専門はジェンダー／セクシャリティ研究。主な研究テーマは、現代日本社会における性をめぐる諸問題に関する研究。

声を出せない同性愛者は、
気づかないだけで、実はあなたの身近にたくさんいるはず

性の多様性を

見直すことから始めてほしい

も、自分で決める人生でありたかったんです」。22歳のときだった。

母親は相当悩んだ末に、こう答えた。「あなたの人生だから好きに生きなさい」。

■ 間違った認識の上陸、広がった誤解

「日本での同性愛理解を妨げたのは、同性愛Ⅱエイズ・HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者といった間違った認識でした」と、河口さんは強調する。

昭和56年にアメリカの大都市で男性同性愛者が謎の奇病で死に至ったことが報道された。そして当時は、男性同性愛者だけに広がる疫病としてその噂は広まっていった。翌57年、謎の病気が「エイズ」と名づけられ、その翌58年にはHIVというウイルスによるものと判明したが、間違った認識のまま、その噂はついに日本にも上陸する。

「昭和60年、実際には血友病の患者がすでにエイズで死亡していたにもかかわらず、厚生省はアメリカ在住の男性同性愛者を日本人のエイズ1号患者と発表したんです」。

その報道をきっかけに、男性同性愛者は「社会に危険をもたらす集団」として認識され、管

理・監視の対象となった。

■ 法廷に出された差別。社会が考えるきっかけに

平成2年、それまで社会の中にあつた同性愛者への差別が日本で初めて法廷の場で問われることとなった。それは、同性愛者団体が公共施設利用の際に行つたカミングアウトに端を発した。

東京を中心に活動する同性愛者団体「動くゲイとレズビアン」の会」が、東京都立府中青年の家で行つた勉強会合宿の際に受けた差別事件。利用の際に、決められた自己紹介を正直に行つたことで、「こいつらホモだぜ」、「おかまがいる」と他の利用者から嫌がらせを受けた。

次回利用時に同様のことが起きないように施設に改善を求めたが、利用自体を断られた。

「同性愛者を同じ部屋に宿泊させるといふことは、男女を同室に宿泊させるといふこと。風呂も同様」というのが大まかな理由だ。「同性愛者は」他の青少年の健全育成にとつて、正しいとはいえない影響を与える」というのが都の回答だった。

結果、1審、2審とも都の利用不承認処分を違法と判断。都は最高裁には上告せず、判決が

■ 実は、同性愛者は、身近にたくさんいるはず

「本人が周りに告げていないので知られていないだけですが、あなたの周りにも同性愛者はたくさんいるはずですよ」。そう話すのは、河口和也さん。自身も同性愛者だと公言し、広島修道大学で社会学の教授を務めている。正確な統計は存在しないが、成長過程の一次的なものや程度にもよるが、同性愛者の率は約5〜10%という説もあるという。

「日常の生活で、『あなたは同性愛者ですか』と聞かれることはほとんどなく、本人も口にしていないため、気づかないだけなんです」。

テレビを付けければ毎日のように「おねえキャラ」のタレントが画面をにぎわしている現在。特殊な才能やファッション感覚を持ち、知識も豊富。芸能人や有名人のカミングアウトにより、その存在と認知度は上がっている。しかし、昭和40〜60年代では「気持ち悪い」といった否定

当時日本には裁判で争うための情報がなく、先進国であつたアメリカの情報を参考にしたという。アメリカでは、昭和53年にはすでに同性愛者であることがカミングアウトした市議会議員が誕生していた。

■ 「異性愛」という言葉の誕生

「同性愛」に対し、「異性愛」という言葉は、通常あえて口にするまでもない言葉で、初めて広辞苑(岩波書店)に登場したのは平成20年に発行された第6

的な意見が多かつた。

「当時知られていたのは、美輪明宏さんくらいでしたが、芸能人ということもあり、自分がお手本とするには遠い存在でもありました」。

中学生のとき、自分が同性愛者だと気が付いた河口さん。「家族や友人にも言えず、異性の恋の話にも入っていきませんでした。自分は一体何者? という疑問とともに、良くない人間、価値の低い人間だと思つていました」。

■ それは、一生誰にも言つてはいけないこと…

当時、誰に言われた訳ではないが、暗黙のルールがあつた。「それは、誰にも言つてはいけないこと。言うとなんか苦しいことになる。一生言わないことがセオリーだったんです」。カミングアウトすることは大変なエネルギーが必要だった。河口さんも、自ら進んで口にしたわけではない。「大学で外国語の勉強をしていたので、家族から『外国人のお嫁さんが来たらどうしよう』という話になつたんです。私にとっては結婚の方が問題だったので…」。

そのとき、初めて母親に告げた。「人に決められる人生より

版からだ。ちなみに、昭和58年発行の第3版では、「同性愛」を「異常性欲の一種」と定義されていた。

「それまで『異性愛』という言葉は、当たり前のことで、気づくことがない言葉でした。しかし、このことは『同性愛』が社会的に認知されてきた証拠だと思つています」。

残念ながらもまだ日本では、相手との人間関係を失うことを半ば覚悟してカミングアウトしている人がほとんどだという。しかし、同性愛者が特別な存在でなく、身近にいてもおかしくないということが人々の常識となれば、こうした決意や覚悟は必要なくなるはずだ。

「同性愛者であるということとは、その人を構成するひとつの要素にすぎません」と、河口さんは強調する。

「同性愛は、決して不幸なことではありません。それは『自分の生き方としての部分』だからです。しかし多くの同性愛者は、まだまだリスクを負いながら生活しています。そのことを理解し、性の多様性を見直してほしいです。何より、同性愛者も異性愛者も、生活しやすい社会をつくつていきたいと思つています」。



「同性愛者」も「異性愛者」も共に生活しやすい社会の構築を

同性愛と異性愛

岩波新書 著者 風間孝 河口和也



同性愛者はなぜ「見えない」存在なのか。さまざまな事件や題材から、異性愛社会に染みつけた同性愛嫌悪の諸相を描き出している。